# 高校生にどうリスクを教えるか？

## ―投資ノウハウ教育からの脱却―

高橋勝也（名古屋経済大学）

### Ⅰ．はじめに―投資ノウハウ教育からの脱却―

政府は 2022 年，資産所得倍増プランを公表し，「安定的な資産形成の重要性を浸透させていくための金融経済教育の充実」という柱を掲げると，2024 年にはその中核を担う金融経済教育推進機構を設置した。同プランを受けて，学校教育が主体となって金融経済教育を推進し，一人ひとりが長い人生を豊かに暮らし続けることのできる資質・能力を培う必要が生じている。高等学校では，平成 30 年に告示された『高等学校学習指導要領』によって，公民科「公共」が新設され，金融経済教育の充実が図られるようになった。具体的には，金融の働きにおいて，「様々な金融商品を活用した資産運用にともなうリスクとリターンなどについて，身近で具体的な事例を通して理解できるようにする[1]」とし，株式や投資信託といった金融商品を活用してリスクとリターンについて扱うとするようになった。

筆者は，30 年以上学校教員として，金融経済教育について取り組んできた。初任者であったころ一部の先輩教員は，「学校で金儲けの方法を教えるのか！」と厳しい批判をぶつけることがあった。しかしながら金融経済教育が，社会科や公民科において非常に重要な位置を占めているとの認識に立ち，ひるむことなく突き進み続けた。この認識に至った視点は 2 点ある。ひとつは，超少子高齢化に突き進む現代社会において，子供たちに自ら生き抜く力をしっかりとつけて欲しいと願った点である。支える側の人々が減少し続けていく以上，これからの子供たちは自分自身で生きぬく力が必要になろう。今の時代より，周囲からの支援が期待できないことは十二分にあり得るのである。もうひとつは，金融（お金）が，ダイナミックで活動的な社会を築き，私たちの生活における幸せを導くと考えるからである。躍動する社会は，チャレンジングな企業がたくさん現れることで実現すると信じている。金融がままならない社会においては，私たちの生活を豊かにしてくれる企業が育たず，明るい未来になり得ないのではないか。私たちの生活を便利にして，幸せにする商品をあふれんばかりに提供してくれるのは，企業なのである。自給自足では生きていけないことに気づいた筆者は，批判を受けることがあっても，金融経済教育の実践や研究を止めることはしなかった。

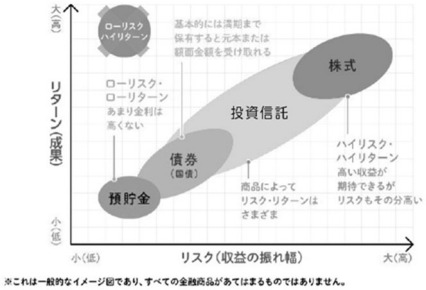
しかし，金融経済教育は結局，投資ノウハウ教育に陥っているという指摘があり，筆者もうなずいてしまうことがある。水野(2024)は，金融経済教育が投資でお金を儲けるといった認識による投資教育に陥っているとし，人生の幸福度である金融ウエルビーングを高める必要があると提起している[2]。水野の論は，先述の金融経済教育を金儲け教育として批判した先輩教員の言とも重なって見えることがある。そのため，学校教育における金融経済教育が，単なる投資ノウハウ教育に陥ることがないように，創意工夫ある教材開発が求められよう。本研究では，リスクとリターンについて，高校生だけでなく学校教員が身近に感じられ

るように，金融やお金をまったく用いることなく考察させることができる教材を開発する。

## Ⅱ．授業でリスクをどう扱うか

### 1．公民科「公共」教科書におけるリスクとリターンの扱い

高等学校学習指導要領がリスクとリターンを公民科「公共」で扱うとしたため，基本的にこれらは，「公共」教科書に掲載されることになった。よって，全「公共」教科書 12 冊（8 社による刊行，内 4 社が 2 種類・2 冊を刊行したため計 12 冊）が，どのようにリスクとリターンを扱かっているか調査した。分析結果は次である。




**資料 1 リスクとリターンの関係**
**金融経済教育推進機構より**

12 冊のうち 8 冊は，**資料 1** のように預貯金・債券・投資信託・株式という金融商品それぞれのリスクとリターンについて図式化したものを掲載していた。つまり，金融商品を直接的に扱い，資産運用や資産形成におけるリスクとリターンについて教授しているのである。残りの 4 冊は，比較的短い文章だけを用いてリスクとリターンについての説明で終始しており，**資料 1** を用いた記述より簡略化されていた。いずれにせよ，全 12 冊共通していえることは，高等学校学習指導要領が，「リスクとリターンなどについて，身近で具体的な事例を通して理解できるように（下線：筆者）」としているものの，金融商品のみによる説明で終始しており，身近で具体的な事例は扱われていないことが分かった。高校生にとって，株式は中学校において学習しており，多少の理解や想像はできるかもしれないが，投資信託は高等学校でもまったく扱うことがなく，高校生にとってほぼ理解不能であると言ってよい。にもかかわらず，高校生に金融商品の理解を促そうとすれば，教員によるフォロー的説明や解説が必要となるものの，すべての教員が投資経験もあるはずなく投資信託の購入経験もなければ，リスクとリターンについて教え切れていないことが十二分に考えられる。

本研究における筆者の主張は，多くの公民科「公共」教科書のようにリスクとリターンを金融商品のみで理解させなければならないのかということにある。高等学校学習指導要領が示す文字通り，身近で具体的な事例で理解させればよいのではないかという提起をする。それが可能であれば，投資経験のない教員であっても誰もが理解しやすい事例で，高校生にリスクとリターンの理解を促進することができると考えるからである。

### 2．リスクとリターンをどう捉え，どう定義するか

教科書を活用しながら高校生にリスクとリターンを教授する場合，多くの教科書が**資料 1** を提示しているため，株式や投資信託などの金融商品を用いることになる。**資料 1** は，預貯金がローリスク・ローリターンであり，株式がハイリスク・ハイリターンであるとし，間に位置する投資信託や債券のリスクとリターンは，これらの中間であることを示している。株式はハイリスクであると認識することは一般的であり，『株式は，「危険」だから手を出すの

をやめよう！』という言は，日常的に耳にすることがある。しかしながら，大人たちからでも発せられる『株式は「危険」だからやめておこう！』という認識は，本当に正しいのであろうか。筆者は誤りであることを言い切りたい。なぜなら，リスクの定義を広い目で見れば，「危険」だけで片付けしまうことは正しくないからである。

筆者が授業においてリスクとリターンを扱うとき，子供たちにリスクの定義をしっかりと示すようにしている。中学生，高校生，そして多くの大学生までもが，「『リスク』を日本語で言うと何というかな？」と問うてみると，『「危険」だと思います！』と答える。筆者は，常にリスクを 2 通りの意味があると伝えるようにしており，その一つは，彼らがイメージする「危険」である。「地震のリスクに備える」と言った場合，身に「危険」が生じる可能性があるため，何らかの対策を施す必要があろう。この場合には，リスクを「危険」と捉えることが正しい。しかしながら，「株式は，リスクが大きい」といった場合，株式が暴落したとしても身に危険が生じる可能性はほぼなく，金銭的な損害を被るだけである。つまり，もう一つの意味は，「（先は読めない）不確実性や振れ幅」のことなのである。学校の子どもたちだけでなく，社会における大人たちも含めて多くが，『株式は，「危険」だから，やめておこう！』という認識を有している現実があり，正確な表現を捉えているとは言い難い。本来，「株式は，先が読めないし不確実性が大きいよね。だから，大きな果実を手に入れられることもあれば，手痛い目にあうこともあるのだね。やはり，株式は振れ幅が大きいと言えますね。」という表現にするべきなのである。また，ローリスク・ローリターンとされる預貯金を表現しようとするときも，「叔父が支援してくれた大学への入学金，絶対に失うことができないから，リスクが小さい銀行に預けておこう！」ということになろう。したがって，本研究での教材開発におけるリスクは，金融経済教育での理解に必要な「不確実性や振れ幅」と定義して展開する。次には身近で具体的な事例によってリスクとリターンを扱う授業実践を紹介する。

## Ⅲ. 金融やお金を用いないリスクとリターン扱う教材開発

### 1. 教材開発と授業実践

本研究で開発した金融経済教育に関わる教材は，スポーツであるラグビーを活用して展開する。本来，金融（株式や投資信託などの金融商品）やお金で教えるべきであろうが，ここでは扱うことをしない。ラグビーは，相手陣地（インゴール）地面にボールをタッチするトライ（5 点），相手の重い反則に対して与えられる 2 本のポスト間にボールをキックするペナルティキック（3 点）などで得点を争う競技である。本教材では，強豪南アフリカ共和国相手に日本代表が挑んだワールドカップ（2015 年第 8 回大会：イングランド・ブライトン開催）での試合を取り上げる。あくまでも引き分けではなく，勝利を目指す日本代表が，失敗・敗北を覚悟でリスクの高いトライ（5 点）を狙いにいくか。勝利はあきらめて確実に引き分けが臨めるペナルティーキック（3 点）を選ぶか。ヘッドコーチやキャプテンによる重要な選択の場面があり，この場面を教材化した。金融には全く関係がなさそうなラグビーの一場面ではあるものの，ハイリスク・ハイリターン（＝失敗・敗北する確率は大きくなっ

てしまうが，大きな果実である 5 点を獲得して勝利を決める）なのか，ローリスク・ローリターン（＝失敗の確率を小さくすることはできるが，3 点しか獲得できず引き分けに終わらせてしまう）なのかの選択を高校生自らに考察させることで，リスクとリターンの本質を理解させることを目指す。

## 2. 授業実践の実際

本授業実践は，YouTube による実際の試合動画の再生，Web による当時のスポーツ新聞記事の提示，授業者の解説や説明で構成される。動画の活用は，当時の興奮や雰囲気まで再現できるので，非常に有効なツールである。本授業実践の実際を次の紙上に再現する。

1. 「“ブライトンの奇跡”（＝ラグビーワールドカップ第 8 回 2015 年大会で、弱小日本代表が強豪南アフリカ共和国をラストワンプレーの奇跡的トライで破った試合）」って知っていますか？→多くの生徒は、聞いたこともないという反応
2. 「では、今から、その試合（＝奇跡的トライの瞬間）を見てみましょう。⇒YouTube 動画による再生
3. 「選手も観客も大興奮した勝利でしたね。」⇒奇跡的トライの瞬間のみ再生（＝ノーカット再生は最後でもう一回実施。この場は、ラグビーを知らない生徒たちのために解説的なコメントを加える意図あり。）
4. 「第 8 回大会の様子を見ていただきましたが、ここまでに至るラグビー日本代表の歴代戦績を確認していきましょう。」→ずっと敗北を続けている日本代表の様子を確認する。
5. 「第 1 回 1987 年大会は…。イングランド戦（7 対 60）をはじめ 3 戦全敗ですね。」
6. （第 2 回 1991 年大会は、この場ではあえて紹介しない。実は、日本代表が辛くも 1 勝を挙げている。）
7. 「第 3 回 1995 年大会も…。世界最強の一角ニュージーランド戦（17 対 145）をはじめ 3 戦全敗ですね。
8. 「では、ここで惨敗してしまったニュージーランドとの試合を見てみましょう。⇒YouTube 動画による再生→日本代表選手がボールのみならず相手選手にさえ触れることができない、まったく歯が立たない様子を確認する。
9. 「このときのスポーツ新聞の記事も見てみましょう。」⇒“日本歴史的惨敗”の文字に注目させる。→日本代表が歴史的惨敗を屈したことを確認する。
10. 「第 4 回 1999 年大会は…。ウェールズ戦（15 対 64）をはじめやはり 3 戦全敗ですね。
11. 「では、ここでも惨敗してしまったウェールズ戦でのスポーツ新聞の記事も見てみましょう。」⇒“惨敗”の文字に注目させる。→日本代表が惨敗を屈したものの、前回あった歴史的は外れて単なる惨敗になったことを確認する。
12. 「第 5 回 2003 年大会は…。フランス戦（29 対 51）をはじめやはり 4 戦全敗ですね。→惨敗より接戦が増えていることを確認する。
13. 「第 6 回 2007 年大会は…。世界最強の一角オーストラリア戦（3 対 91）など 3 敗を喫しましたが、カナダ戦（12 対 12）は引き分けにしましたね。→勝利は成せなかったが、引き分けがあったことを確認する。
14. 「第 7 回 2011 年大会は…。世界最強の一角ニュージーランド戦（7 対 83）など 3 敗を喫しましたが、やはり、再びカナダ戦（23 対 23）で引き分けに持ち込みましたね。→再び引き分けは成したが、再び勝利を成し得なかったことを確認する。
15. 「では、ここでのフランス戦（21 対 47）でのスポーツ新聞の記事も見てみましょう。」⇒“惜敗”の文字に注目させる。→日本代表が歴史的惨敗を屈し、惨敗も屈してきたが、負け方が惜敗へ変化したことを確認する。
16. 「ずっと敗戦が続く日本代表としては、喉から手が出るほど勝利を掴み取りたい気持ちで、懸命に練習などにも取り組んだことでしょうね。」→どうしても日本代表は、勝利したい環境にあることを確認する。
17. 「いよいよ先ほど一緒に見た第 8 回 2015 年大会が始まります。初戦の相手は、世界最強の一角南アフリカ共和国です。
18. 「ラストワンプレーを残す試合終了間際で 29 対 32 の大接戦です。日本代表のビハインドは 3 点。トライの 5 点が取れれば大逆転という状況です。」
19. 「日本代表を見下していたかもしれない相手（南アフリカ共和国代表）は、日本代表の健闘に焦ったのかもしれません。最後に重大なミス（反則）を起こしてしまいます。」⇒YouTube 動画による再生→南アフリカ共和国代表の選手の一人が、本来触れてはいけない（日本側の）ボールを素手で取ってしまうこと（＝重大な反則）について解説し確認する。
20. 「ここで日本代表は、反則による大きなチャンスを獲得します。そして、重要な選択に迫られます。スクラムからトライ（失敗の可能性は高いがボールをグラウンド中に展開して、トライの 5 点を狙いあくまでも勝利を目指す）かペナルティキック（確実に 3 点を獲得して、同点引き分けに持ち込む）かの選択です。
21. 「試合を指揮するヘッドコーチの指示は、ペナルティキックでした。つまり、同点引き分け狙いを命じたのです。」
22. 「しかし、キャプテン（リーチ・マイケル氏）は、ヘッドコーチに反旗を翻します。失敗を覚悟してスクラムからトライ（＝超ハイリスク）を選択したのです。」⇒YouTube 動画による再生→相手の反則後、数秒間を置いてキャプテンが主審にスクラムからトライにすることを伝達する（＝ヘッドコーチへの反抗）シーンで確認する。
23. 「いよいよ日本代表のチャレンジが始まります。奇跡を信じて、日本代表はスクラムからトライ（5 点）を狙います。残り時間なしのラストワンプレーのため、ちょっとしたミスによる試合中断でゲームセット、終わりです。そうなってしまったら、

日本代表は敗北です。それでも、日本代表は失敗を恐れずに突き進んでいきます。さあ、最初から最後まで見てみましょう。（約 1 分間）⇒YouTube 動画による再生→相手も必死に日本代表の攻撃を食い止めるが、日本代表は右に左にボールを展開して、劇的な逆転トライを決め切るシーンを確認する。（＝5 点獲得、34 対 32 となり奇跡の大逆転を演出）。

24. 「さあ、どう感じたでしょうか。人は安心・安全に生きることを望む生き物でもあります。わざわざリスクを冒（おか）す必要もないのでは！？という声も聞こえてきそうです。しかし、過去に歴史的惨敗、惨敗、惜敗を積み重ねて、引き分けという結果まで実現できるようなった日本代表には、引き分けではなく、どうしても勝利をつかみ取りたいという決断がキャプテンにはあったのではないでしょうか。」

25. 「みなさん、“すべて成功したら挑戦とは言わない”という言葉を知っていますか。そう、“挑戦には失敗はつきもの”なのです。挑戦の“先は読めない”ですし、結果がどうなるのかは、誰にもわからないのです。」

26. 「人生も同じではないでしょうか。大学受験という挑戦も失敗（不合格）はつきもので、先（結果）は読めないものです。リスクを避けて、合格しやすい安全圏の大学を受験するのも一つの手です。しかし、その大学は第一志望でしょうか（＝リスクを避けると大きな果実は手にできない）。リスクを受け入れて（不合格になるかもしれないが）第一希望にチャレンジし、合格できれば非常に大きな喜び（果実）を手に入れることになるのでしょう。リスクを避けて第一希望の大学に入学することは難しいと言えるのかもしれません。」→リスクを取らないと大きな果実は手に入れることはできないことを確認する。

27. 「ここでリスクについて考えてみましょう。リスクは、“危険”と意味することがあり、みなさんもそのように考えていることが多いのではないでしょうか。しかし、日本代表の取ったリスクは“危険”だったでしょうか。そうではなく、この場合は、成功するか失敗するかわからない“不確実性”と捉えるべきでしょう。成功するか失敗するか誰にも先は読めないですものね。」

28. 「また、リスクは“振れ幅”と意味することもあります。“振れ幅”は大きくなったり、小さくなったりします。リスクを取りにいくと“振れ幅”は大きくなります。つまり、大成功して 5 点獲得し大逆転ができることもあれば、失敗して敗北で涙を流すこともあります。大きな果実を獲得することもできれば、大きな挫折感を味わうこともあり得るのです。つまり、リスクを取ると“振れ幅”が大きくなるのです。

29. 「リスクである“振れ幅”は、小さくすることもできます。つまり、リスクを避けるようにするのです。ペナルティキックの 3 点を取りにいくようにすれば失敗する確率を減らすことができるでしょう。しかし、成功したとしても喜びは半分で、結果も引き分けにしか持ち込めないのです。リスクを避けると“振れ幅”が小さくなり、失敗の確率も喜びも共に小さく収まることに気づきましたか。

30. 教科書にある**資料 1** を見てみましょう。これは、資産運用や資産形成を説明するときに利用されるものでもあります。自らのお金を育てる（増やす）としたら、どのような方法があるかがわかりますね。リスクを避ける金融商品には、預貯金があり“振れ幅”の小さいローリスク・ローリターンです。たくさんお金が増えることは期待できないですが、確実にお金を増やすことはできそうですね。つまり、“不確実性”が小さいです。」

31. 「一方、リスクを取る金融商品には、株式がありますね。“振れ幅”の大きいハイリスク・ハイリターンです。たくさんお金が増えることは期待できるものの、失敗すると大きな損失を被ることになるのです。つまり、“不確実性”が大きいとも言えますね。」

32. 「まとめになります。ラグビーの選択も、大学受験の志望校選定も、お金の育て（増やし）方も、リスクの取り方によって結果が大きく異なることが分かりましたね。大きな果実が欲しいときにリスクを避けてばかりいては、それを得ることはできません。物事を安心・安全に進めたいときにリスクを取りに行ってしまうと大きな失敗を引き起こし、大変な困った状況を生み出しかねない。リスクを取る、取らないで私たちの人生は大きく変わりそうです。これからの君たちには、冷静にリスクを見極め、判断、決断する力を兼ね備えることが大切だと考えます。」

33. 「私たちが生き抜く人生において、選択の場面はたくさん訪れます。どの大学へ行くか。海外留学はするか。どの会社へ就職するか。居住はマイホームか賃貸か。どうやってお金を育てる（増やす）か。すべての状況において、リスクはどのくらいとれるか、リターンはどのくらい得られるかを勘案して選択をするようにしないといけないですね。人生 100 年時代と言われて久しいです。みなさんの人生が豊かになるよう、リスクとリターンは常に意識して行動することは大切なのかもしれませんね。」

## Ⅳ. 総括

本研究は，投資ノウハウ教育からの脱却を目指して，高校生にどのようにリスクを教えるべきかを検討した。筆者は，人生 100 年時代において，これからの若者たちがノーリスクで生き続けることはできないと信じている。山岸・ブリントン（2010）は，日本人がリスクに背を向けることと内向きな姿勢に対して大きな危惧を抱くとしている。日本人は，リスク回避傾向にあるとするが，それ自体悪いことではない。しかし，リスクを回避するばかりでは

なく，時には日本代表のようにヘッドコーチに反旗を翻してでもリスクを取りに行く必要がある場面は誰にでもあるのではないか。そうしなければ，自らが幸せを実感できる人生は，遠ざかってしまうのではないか。子供たちには，ずっと幸せに生き続けて欲しい。そのために，高校生にどのようにリスクを教えるべきか，追究し続けたいと考えている。

最後に，本研究の成果と課題をまとめたい。成果は 2 点あると考えている。ひとつは，学校教員が難しいと捉えがちな金融経済教育を行うことのハードルを下げることができたのではないかという点である。高等学校で公民科・家庭科を担当する教員に対する実態調査[3]では，「金融経済教育を授業で取り扱う際に，難しいと感じていることはありますか。」という問いに対して，「教える側の専門知識が不足している（50.8%）」，「適当な教材がない（16.3%）」となっており，なにも金融商品を無理に理解させながらリスクとリターンを扱う必要はないというメッセージを送れたのは意義深いものになるのではないか。もうひとつは，生徒側からの視点である。同実態調査，同問いに対して，「生徒にとって理解が難しい（50.6%）」，「生徒の興味・関心が低い（28.3%）」，という課題もあるものの，高校生にとってスポーツという身近で具体的な事例でリスクやリターンについて考察させることができた意義は大きいと考えている。本研究は，金融経済教育を分野として進めてはいるものの，キャリア教育，ひいては生き方教育，高校生の生きる力の育成に寄与できるとすれば，筆者としても望外の喜びになる。

課題は，本授業実践に対して，分析や検証ができていないことである。生徒や教員に対するアンケート調査や分析を進めていけば，本研究の説得力も高まろう。まずは，教材開発と授業実践を優先して取り組んできた。今後は，調査・分析を進めていくことで，本研究成果の普及・浸透を試みたい。

＜参考文献＞

山岸俊男，メアリー・C・ブリントン，『リスクに背を向ける日本人』，講談社，2010 年 10 月

---

[1] 文部科学省，『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説　公民編』，2018 年 7 月，p. 71
[2] 水野英雄，中部経済新聞「オープンカレッジ」，2024 年 4 月 4 日より
[3] 金融経済教育を推進する研究会（事務局：日本証券業協会　金融・証券教育支援本部），『高等学校（教員・生徒）における金融経済教育の実態調査報告書』，2023 年 9 月，p. 33